HCニューズレター

No.18

Human Care News Letter

2017年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

学会新体制の発足

第七期会長に選出されて

日本赤十字看護大学　遠藤　公久

第六期に引き続き会長をお引き受けすることになりました。この三年間は責任の重さと私の力不足を痛感させられることばかりでした。しかし、ただ躊躇していても歩めません。私のできる精一杯のことをこの三年間で頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

三年前、本学会の学術活動の活性化のため、学会誌の充実、研修の拡充、そして会員数の増加に向けた広報活動の推進の三つを目標課題にあげさせていただきました。この三年間への評価は、当然ながら会員の皆さまに委ねるしかございません。いま私なりに、振り返りますと、すべて道半ばといわざるを得ませんので、今期もこの三つの目標を継続してまいりたいと思います。そこで、ここでは第六期の振り返りと、今期の新たな課題について述べさせていただくことでご挨拶に代えさせていただきます。

①学会誌の充実：審査委員会をはじめ多くの関係者のご協力のお陰で、審査の迅速化が進み、投稿数も順調に増加し、掲載スピードもアップしてきております。今期はさらに審査と掲載の迅速化のため電子化を進めてまいりたいと思います。どうぞ積極的にご投稿いただきますようよろしくお願いいたします。

②研修の拡充：大会主催側、研修委員会のご協力のもと魅力あるテーマを設定いただき、毎回定員を超過する盛況な研修を開催していただきました。今後は、年一回の研修に留まらず、研修会のさらなる拡充を図れるよう検討してまいります。また、公認心理師を見据え、認定制度について検討していきます。

③広報活動の推進：HPの掲載が少し遅延・沈滞気味でしたので、会員向け情報発信の迅速化と内容の充実を図りたいと思います。学会の認知度を高めるために、三年間で二度の他学会との合同大会を開催してまいりました（交流分析学会と埼玉県立大学保健医療福祉科学学会）。今期も大会主催者側、学術委員会にご尽力をいただき、引き続きこの方針を踏襲していくつもりでございます（健康心理学会など）。

最後に、会員の皆様お一人お一人にとって意味ある、学びある学会になりますよう進めて参ります。是非とも忌憚ないご意見をお寄せいただきますよう、心よりお願い申し上げます。



日本ヒューマン・ケア心理学会
第七期会長 遠藤公久先生

日本ヒューマン・ケア心理学会 第七期役員

会長	遠藤　公久	日本赤十字看護大学
理事	※安保　英勇	東北大学
	石川　智	杏林大学
	伊藤　まゆみ	共立女子大学
	伊藤　美奈子	奈良女子大学
	梅村　美代志	聖徳大学
	大場　良子	埼玉県立大学
	長田　久雄	桜美林大学大学院
	※片山　富美代	桐蔭横浜大学
	※木村　登紀子	いちかわ野の花心理臨床研究所
	小玉　正博	埼玉学園大学
	佐居　由美	聖路加国際大学
	※清水　裕子	香川大学
	菅　佐和子	京都橘大学
	関谷　大輝	東京成徳大学
	竹田　眞理子	和歌山大学
	※羽鳥　健司	埼玉学園大学
	三田村　啓子	京都医健専門学校
	中込　さと子	山梨大学大学院
	山崎　登志子	広島国際大学
監事	島井　哲志	関西福祉科学大学
	藤澤　伸介	跡見学園女子大学
顧問	岡堂　哲雄	聖徳大学

以上、五十音順　※常任理事

ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発

日本ヒューマン・ケア心理学会第十八回大会を開催して

埼玉県立大学　鈴木 玲子

平成二十八年九月二十四・二十五日に日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第十八回大会を、埼玉県越谷市にある埼玉県立大学において開催いたしました。今大会は、保健医療福祉の発展を目指した学会である埼玉県立大学保健医療福祉科学学会と共同開催とし、この学術的交流により視野を広げてヒューマンケアを見つめました。大会テーマは「ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発」で、保健医療福祉分野を担う専門職のキャリア開発と多職種連携の推進について考える機会となりました。一日目のポスター発表、共同シンポジウム、懇親会の三つの合同プログラムにおいて、学会の学術的交流を図ることができました。一日目の学術集会には七十名（会員五十三名、非会員十七名）、二日目の研修会には六十七名（会員二十九名、非会員二十五名、学生十三名）の方に参加いただきました。参加いただいた会員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

大会一日目の一般演題には三十一題（口頭五題、ポスター二十六題）の発表がありました。また基調講演として「アイデンティティ論からみたプロフェッションの生成と深化―「人」と「専門性」をどう育てるか―」を岡本祐子先生（広島大学大学院）にご講演いただきました。専門家としてのアイデンティティ獲得の研究を通して、次世代の専門家育成のためのキーとなる考え方についてご説明いただきました。そのほか、二つの学会による共同シンポジウムでは「多職種連携の醍醐味と地域包括ケアへの展望」として、埼玉県立大学の伊藤善典先生、開業医の鶴岡優子先生、看護師で介護支援員の池上昌子先生、理学療法士の前園徹先生、学校心理士の中村恵子先生による専門職の活動と多様な連携の可能性について意見交換がなされ、子どもから高齢者、障がいのある方を含めた地域包括ケアを目指すための連携について考える機会となりました。



大会長　鈴木玲子先生


埼玉県立大学

大会二日目の研修会は、小塩真司先生（早稲田大学文学学術院）に「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法　ＡｔｏＺ」を講義いただきました。参加者からの意見も取り入れながらの調査研究に関する講義で、参加者からは「統計手法の疑問が解決した」「とても勉強になった」など充実した感想も聞かれ、研修会終了後には質問者で列をなすほど大盛況でした。

今大会は共同開催であることから、早くから二つの学会で相談しながら計画を進めてきました。一つの企画を考えるにも、意見を交わし、互いを理解しあって作業を進める苦労を感じることもありましたが、遠方からも多くの参加者をお迎えすることができましたことで報われた気持ちを感じております。大会準備や当日運営に沢山のご助言やご支援を賜りました日本ヒューマン・ケア心理学会の理事および会員の皆様、ご協力いただいた埼玉県立大学の関係者の方々に心より感謝申し上げます。

基調講演

「アイデンティティ論からみたプロフェッションの生成と深化 ―「人」と「専門性」をどう育てるか―」

講演者　広島大学大学院　岡本 祐子先生

成人期のアイデンティティの危機、プロフェッションの生成と世代間継承、力動的心理療法といえば、私が最初に思い浮かべるのは岡本祐子先生です。国内はもちろんのこと、世界的にも非常に精力的に臨床活動と研究を展開なさっている、有名なあの岡本先生の基調講演を拝聴できることを大変楽しみにしていましたが、期待以上の素晴らしいご講演にとても感激しました。会員の皆様には、ご講演の中で特に私の印象に残った点について、私がお見受けした岡本先生のお人柄と共にご紹介できればと思います。

ご講演の内容は、「1. 時代・社会の変化と心の問題・障害・ケアの変遷」、「2. 内的〈問い〉とErikson理論の魅力」、「3. 高度情報化社会におけるアイデンティティとプロフェッションの土台の希薄化」、「4. 専門家アイデンティティの生成と世代継承性」、「5. 対人援助職の専門家アイデンティティを育てる視点」の5つで構成されていました。どれも大変素晴らしいお話でしたが、私は特に、「4」が印象に残っています。ここでは、専門技術のレベルの進歩に対して、それを担う土台を育成することの重要性についてお話がありました。現代の高度に発展した情報化社会では、様々なことのスピードが要求されるが、人の心が成長・発達する基本的プロセスやそのために必須の経験、あるいはテンポは、三十年前、あるいはそれ以前とほとんど変わりがなく、この心の部分の土台なくして、技術の真の修得や成長や発展はないとのことでした。私はこのお話を伺って、現代社会は、明確で、簡単で、便利で、目に見える形の具体的利益や結果が追求されがちですが、これらを作ったり、使ったりする人間の土台にもっと目を向けなければならないと薄々感じてはおりましたが、岡本先生に明文化していただき、よりはっきりと認識することができました。これに限りませんが、岡本先生のご講演は、単に机上の理論を紹介しているだけでなく、理論と現象の関連が非常にリアルに生き生きと描写されており、これはきっと岡本先生ご自身の人生経験や哲学が反映されているからこそであると感じました。しかも、ご講演内容の一部は、岡本先生が大学院生だったころからお考えになっていたことであるということを知り、私が大学院生だったころを思い返して比較してみた時に、決して超えることのできない才能の壁と、強い意志に基づく弛みない努力の存在を目の当たりにした想いをし、強い衝撃と軽い絶望を覚えました。

お話の随所から、岡本先生のエネルギッシュでパワフルで実直で知的で活力に満ち溢れている感じを受け、気がついたらあっという間に六十分が過ぎていました。岡本先生、お忙しいところ、貴重なお話を誠にありがとうございました。

（埼玉学園大学　羽鳥健司）



基調講演　岡本祐子先生

共同シンポジウム

「多職種連携の醍醐味と地域包括ケアへの展望」

本シンポジウムは、(1) 地域包括ケアシステム総論、(2) 各論、(3) 多職種連携システムにおける心理士の役割の三部から構成されました。

第一演者である埼玉県立大学の伊藤善典先生が地域包括ケアシステムの根拠となる法律と成立背景を説明されました。このシステムは「地域の実情に応じて高齢者が可能な限り住み慣れた地域でその有する能力に応じ、自立した日常生活を営むことができるよう医療、介護、介護予防、住まい及び自立した日常生活の支援が包括的に確保される体制」です。地域包括ケアシステムのあり様は地域の実情に応じて様々であり、多職種連携もそれによって変わるため、それぞれの地域において考える必要性を強調されました。

これを受けて、第二演者である「福祉のニッカ介護相談室」の池上昌子先生がケアマネージャーの立場から在宅療養の支援事例を紹介されました。たとえば、末期がんで大学病院への遠距離通院を余儀なくされていた独居高齢のAさんは、体力の低下に伴い通院そのものの負担を感じていました。そこで、ケアマネージャーがAさんの意向を汲みながら問題を整理し、かかりつけ医の往診やホームヘルパーの他、近所の人的資源などのインフォーマル資源を縦横に組み合わせた在宅介護を実現し、Aさんが納得の最期を迎えた経験を報告されました。

第三演者の「上尾メディカルグループ」地域健康推進研究所の前園徹先生は、地域包括支援センターと連携した地域リハビリテーション活動支援事業を紹介されました。①訪問サービスでの同行支援、②通所施設でのニーズに応じた段階的な運動機能および生活行為改善プログラム、③地域ケア会議でのコンサルテーション、④認知症ケアや転倒予防など市民講座やリーダー研修での介護予防の啓発の展開により事業の基盤整備を進められました。

第四演者である「つるかめ診療所」の鶴岡優子先生は、医師二名の在宅療養支援診療所を拠点に多職種・多機関との連携・協働のための専門職者の月例勉強会「つるカフェ」を主催されています。また、協働援助者同士が「顔が見える以上にお茶する関係」でケースを振り返り、相互コンサルテーションやピアカウンセリングを含んだリフレクションを行う「ふりカフェ」、市民への啓発活動である市民講座による三層での活動を通し、地域包括ケアにおける情報ステーションの役割を担っています。

第五演者である東北福祉大学の中村恵子は、福祉事務所に創設された学校不適応の子ども支援事業スーパーバイザーの立場から、多職種連携支援の成否を分けるものはケースマネジメントの的確性にあることを報告しました。役割分担や遂行課題の明確化によって援助が進捗するというものです。

これらの話題提供を元に、座長の萱場一則先生（埼玉県立大学）・清水裕子先生（香川大学）から意見交換が求められ、フロアと共に援助チームをコーディネートする難しさとリーダーに求められる資質について討論が行われました。

（東北福祉大学　中村恵子）



共同シンポジウムの様子

「共同開催について（埼玉県立大学保健医療福祉科学学会第七回学術集会）」

埼玉県立大学　大場 良子

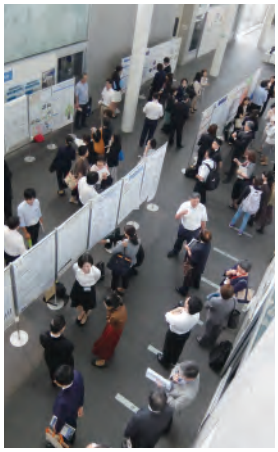
今大会は、人間の健康および福祉の向上を目指した本学会と、保健医療福祉の発展を目指した埼玉県立大学保健医療福祉科学学会の共同開催といたしました。これら二つの学会に共通する「ヒューマン・ケア」の発展に寄与できるプログラムとなるように検討を重ねて、大会初日のシンポジウム、ポスター発表、懇親会の三つを合同プログラムといたしました。

先ず、シンポジウムでは、地域包括ケアの整備が求められる中で、ヒューマン・ケアに関わる課題である多職種連携について考える機会とするために「多職種連携の醍醐味と地域包括ケアへの展望」をテーマとしました。パネリストは厚生労働省での勤務経験がある福祉行政の研究者、地域医療の担い手として活動する開業医、介護支援専門員として活躍する看護職、そして介護予防に取り組む理学療法士、学校心理士として活躍する心理職の各専門家です。行政の立場では、地域包括ケアシステムの成り立ちや、実情を踏まえて今後どのような発展が期待されるのかについてお話をいただきました。医師、介護支援専門員（看護師）の立場からは、地域医療における医療と介護、福祉の専門職の連携を可能にする取り組みの紹介がありました。理学療法士の立場からは、地域で実践しているリハビリテーション活動や多職種との連携の現状についてお話をいただきました。そして、本学会からは、心理職の立場として中村恵子さんに参加いただき、学校不適応の子どもを対象にした自立促進のための家庭訪問支援モデルと心理職の役割が紹介され、多職種連携における問題提起がなされました。それぞれの立場より多様な連携の可能性について深い議論を交わす機会をいただき、非常に有意義な時間となりました。

ポスター発表は、両学会の発表会場と発表時刻を同じにしたことにより、学問分野が異なる専門職が集まり、ヒューマン・ケアについて語り合い、双方の学会員が交流する機会をもてたと感じました。

また、初日夕方に開催した懇親会は、両学会員参加のもと、学生食堂において美味しいお酒とお食事、そしてスイーツは埼玉県の銘菓でおもてなしをさせていただきました。余興では埼玉県立大学のアカペラサークル「ＪＯＹ」の歌声を聴きながら、終始、和やかな会となりました。

最後に、この場をお借りしまして、二日間に渡る大会にご尽力いただきました会員の皆様に、心より感謝申し上げます。



ポスター発表の風景

研修会報告

「ヒューマンケアにおける実証研究を 支える調査法ＡｔｏＺ」

講師　早稲田大学文学学術院　小塩 真司先生

二〇一六年度の研修会が九月二十五日に開催されました。講師の先生に早稲田大学文学学術院の小塩真司先生をお迎えし、「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法ＡｔｏＺ」というテーマでお話していただきました。当日、会場には多数の参加者がみられ、実証研究における調査法の重要性と関心の高さが窺えました。今回、テーマにもあります「調査法ＡｔｏＺ」ということで、量的データによる調査を行う際には必須となってくる心理尺度や、データの取り扱い方について、基礎的な部分から解説していただきました。

はじめに、心理学の研究方法についてお話がありました。大きく分けて心理学では実験法、観察法、調査法、面接法といった四つの研究手法があり、行動中心あるいは言語中心であるのか、状況統制に対してどの程度の自由さがあるかなど、それぞれの研究手法が持つ特徴について説明がありました。その中の調査法は人間の性格や、態度・意識といった概念を測定する際に実施される手法で、比較的容易に実施でき、大量のデータを得られる反面、あくまでも調査協力者の「主観」であり、認知された「量」で把握しようとするものであるという説明がありました。何らかの概念を「量」として測定するにしても、性格や意識といった心理学で取り扱われる概念の大半は実際に目で確認できないものであり、そういった目で見えない概念に値を割り振ることによって数値的なデータとして取り扱えるようになるという説明から、心理尺度についてのお話に続いていきました。小塩先生は図表や身近な例を常に提示しながら説明してくださったため、自然と調査法についての前提部分を理解することができました。

次に、心理尺度の中身について信頼性や妥当性といった、より調査法の核心に迫る専門的な内容についてお話していただきました。尺度の信頼性を求める手法や妥当性の種類に様々なものがあり、混乱してしまう部分ではありますが、例を提示しつつ丁寧に説明してくださいました。例えば、基準関連妥当性が臨床群と健常群の比較がはじまりであったといったように、検証手段が発展していった内情から解説していただいたことによって、理論的に理解することができました。日頃、心理尺度を使用して調査を行おうとすると、必ずと言って良いほど尺度の信頼性や妥当性に着目します。特に私は信頼性や妥当性を理論的に理解できているかというと、実はあまり理解できておらず、曖昧なままにしていた部分があったことが、小塩先生の丁寧な説明から実感できました。

最後に、因子分析をはじめ、重回帰分析、共分散構造分析といった変数間の説明率を検定する統計手法において登場するパス図について解説していただきました。相関や偏相関の特徴といった基本的な内容から因子分析における因子モデルの見方、重回帰分析や共分散構造分析によって作成されたパス図についての読み取り方についても、分かりやすく説明していただきました。パス図をあまり理解していないと難しく捉えてしまいがちですが、意外と単純な図の組み合わせで構成されていることを先生の説明によって理解することができました。

調査法における、分析手法やパス図の読み取りは研究論文でも頻繁に登場するものですが、意外とその中身や理論の理解に



小塩真司先生



研修会の様子

まで至らない、ということをよく耳にします。今回の小塩先生による「調査法AtoZ」によって、分析手法やパス図に苦手意識を抱かれていた方も、基礎の基礎から理解することができた、そんな研修会であったように思えます。

（埼玉学園大学臨床心理カウンセリングセンター　宮戸悠貴）

最優秀発表賞　口頭発表部門
「第十八回優秀発表賞を受賞して」

東京成徳大学　関谷 大輝

このたびは、学術集会第十八回大会において口頭発表部門の優秀発表賞にお選びいただき、大変光栄に存じております。会場にお集まりいただきました先生方、ご審査をいただきました先生方、そして、本研究の実施にご協力をいただいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今回は、ミャンマーからの留学生であるナン カンキンさんとの共同研究の結果を発表させていただきました。ミャンマーは、いわゆる観光旅行先としては、日本人の多くにとって、残念ながらまだあまり馴染みのない国かもしれません。しかし、ノーベル平和賞を受賞し、同国のリーダーでもあるアウン・サン・スー・チー氏の名前は、ほとんどの方がご存知のことと思います。

本研究では、在日ミャンマー人（含む留学生）と日本人を対象に、質問紙調査を行いました。主な研究目的は、友人集団との関係の持ち方や、友人集団の捉え方の特徴を比較することでした。研究への着想は、ナンさんが抱いた「日本人は、グループの存在を非常に意識し、それが友人関係を左右する」というある種の〝違和感〟にあります。友人グループとの関わりについては、たとえば佐藤（一九九五）や高坂（二〇一〇）などにおいて、日本人の特徴の一端が指摘されていますが、他国・多文化との比較データは必ずしも多くはありません。特に、ミャンマー人との比較は前例がなく、今回の調査実施に至りました。結果的に、日本人は「友人から嫌われたくないと強く思っているが、それは必ずしもストレスにはつながらない一方で、友人集団との関わりこそがストレスを強く規定する」ことや、「ミャンマー人の方が仲間集団への信頼感が高い」といったことが分かりました。

日本人の特徴を深く理解することは、ひいては来日する外国人支援にもつながります。本研究で見られたような〝日本人ならではの特徴〟は、おそらく他領域でも様々な形で見出だせるものと思われます。今回の研究を糧に、文化差の視点を忘れないように今後の研究に取り組んでいきたいと考えます。

最優秀発表賞　ポスター発表部門
「第十八回優秀発表賞を受賞して」

日本学術振興会　特別研究員PD
東京成徳大学　応用心理学部　佐藤 修哉

この度は、優秀発表賞を授与していただき、大変光栄に感じております。調査にご協力いただいた学校の先生方や生徒のみなさん、審査に携わってくださった先生方、連名発表者の上埜高志先生（東北大学）、安保英勇先生（東北大学）、内田知宏先生（尚絅学院大学）に、心より感謝申し上げます。

今回、「メンタルヘルスリテラシー向上を目的としたプログラムの効果―諸要因を用いた群分けによる検討―」と題し発表いたしました。プログラムそのものの効果については、統制群との比較を通じてすでに明らかとなっており、詳細につきましては、本学会における過去の学術集会でも発表させていただいておりました。今回の発表では、もう少し踏み込み、どのような特徴をもった群に対して、どのような効果が得られるのかということについて検討しました。より効果的なプログラムの作成に向けて知見を得ることが目的でした。

検討の結果、私的自意識の高い群や家族機能が低い群、抑うつが高い群に対して、より効果をもたらすプログラムであったことが示され、臨床的に意義のあるプログラムであることが明らかとなりました。今後、さらに活動を展開していくためのエビデンスを得ることができたと考えています。また、より効果をもたらす対象が明らかになったことで、さらに効果的なプログラムを作成していくためのヒントも得られたと考えています。

もともと、この研究をはじめるにあたり「予防」の考え方を大切にしたいと考えていました。一九六五年のボストン会議を端緒としてコミュニティ心理学が確立されて以来、予防の考え方が重視されるようになってきています。特に、昨今は、ストレス社会ともいわれる現代において、メンタルヘルスに関しての予防の重要性がさらに強く認識されるようになってきているのではないかと感じています。今後も、微力ではありますが、広く人々の心の健康に寄与できる有意義な研究を積み重ねていくことができればと思います。

「学術集会第十八回大会に参加して」

埼玉県立大学　宮部（森山）明美

今回、初めて日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会に参加させていただきました。また、ポスター発表もさせていただきました。私は看護職のため、今まで看護系の学会に参加することがほとんどでした。そのため、心理系の先生も多く参加される大会はどのような雰囲気なのか最初は不安な気持ちもありました。しかし、大会テーマが「ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発」ということで、とても興味のあるテーマであり、大会を楽しみにしておりました。

岡本祐子先生の基調講演より、エリクソンの理論やアイデンティティの獲得についてなど、とてもわかりやすく、専門家育成や自分自身のキャリアについて考えさせられました。

研修会はSPSSで有名な小塩真司先生の講演でした。私は分析をする際、小塩先生の著書をバイブルとして何度も見直して参考にしていますので、その先生から講義を受けることができるということで、大変楽しみにしておりました。研修会は期待通り、とても私にとって収穫のある内容でした。調査票作成から分析にわたり、基本から応用までとても丁寧にわかりやすく講義いただきました。改めて、自分でできていなかったことや課題を明らかにする機会となり、今からでもすぐに実践できる内容であり、早速参考にしようと思っています。

ポスター発表では、埼玉県立大学保健医療福祉科学学会と同じ場所での発表であったため、多くの他職種の先生方の発表に触れることができ、大変勉強になりました。最初は、あまりの先生方の多さに圧倒されてしまいましたが、自分の発表内容について意見交換ができたことで、新たな知見を得ることができました。

今回の大会では多方面から多くの学びや出会いがあり、大変貴重な時間を過ごすことができ、感謝しております。今後の研究の発展につなげていこうと改めて実感しております。

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
第19回大会のお知らせ
〈ヘルスケアシステムにおけるヒューマン・ケアデザインの探求〉

開催日程：2017年9月30日（土）・10月1日（日）
開催会場：山梨大学キャンパス（詳細は第1号通信にて公表予定）

大会テーマ：「ヘルスケアシステムにおけるヒューマン・ケアデザインの探求」

・大会講演　「医療におけるヒューマン・ケア」
　講師　後藤清恵氏（独立行政法人病院機構新潟病院　臨床研究部
　臨床心理・遺伝カウンセリング室長／心理療法室長）
・シンポジウム「ヒューマン・ケア実践のさらなる探求」
・研修会　「動機づけ面接法
　行動に移して欲しい相手に、明日から使える新しいスキルとは？」
　講師　松尾邦功氏（日本禁煙学会認定専門医、KUNIX代表）
　MINT（国際的動機づけ面接トレーナー・
　寛容と連携の日本動機づけ面接学会常任理事）
　（原則として事前申し込みですが、空きがあれば当日参加も
　受け付けます。会員には修了証を発行します。）

今後のスケジュール
1. 演題申し込み　2017年4月1日～6月30日　発表論文集原稿提出
2. 抄録原稿提出　2017年4月1日～8月31日
3. 参加申し込み　2017年4月1日～8月31日

■抄録集は、大会受付でお渡しいたします。

大会HP　：第1号通信でお知らせいたします。
大会事務局：〒409-3898 山梨県中央市下河東1110番地
山梨大学大学院総合研究部成育看護学講座（中込研究室）
日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第19回大会事務局
TEL／FAX：055-273-8457
E-mail：hc19@yamanashi.ac.jp

第19回　大会準備委員会委員長…中込さと子（山梨大学大学院総合研究部　教授）

「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

学会誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています（執筆要項など昨年変更されておりますのでご注意ください）。ご投稿・ご照会は左記学会誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文（2000-2015 No.2）のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。なお、パスワードは、会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ID:HCkaiin2017　パスワード:GyNzGu18
なお、このID及びパスワードは、2017年4月1日より有効となる予定です。それまでは前年度のID及びパスワードをお使い下さい。
（Web担当　岩崎祥一）

編集後記

ここに、第七期の役員体制をお知らせする運びとなり、今さらながら、一九九九年秋の創立大会が思い出されます。小さく生まれて大きく育ったというよりは、「小さいながらも楽しい学会」であったような感じを抱くのは、私だけでしょうか…。知恵と力を寄せ合って、第六期までを歩んできて、本号の冒頭に意欲溢れる遠藤会長のご挨拶を掲載できますのは、嬉しい限りです。
今年、山梨大学の中込さと子先生のもとで開催される学術集会第十九回大会については、上方の記事と、大会第一号通信をご覧の上、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。
（広報担当　木村登紀子）

学会事務局および学会誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
Tel & Fax: 03-3409-0914
E-mail: humancarepsy@redcross.ac.jp

●学会誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax:　022-795-6149
E-mail: jhcs@m.tohoku.ac.jp